

高校時代における課外活動の実態調査

Survey of Extracurricular Activities in High School

八尾 泰寛

小野田 桂子

YAO Yasuhiro

ONODA Keiko

1. 目的及び方法

本学女子体育研究所では、平成27年度東京女子体育大学の学生を対象とした高校時代の課外活動の実態について質問用紙による調査を実施した。今年度はその調査を継続し、一般女子大学生を対象に同じ調査を行い、女子体育大学生と一般女子大学生の比較を試みた。

2. 研究結果及び考察

1) 高校時代の練習時間について表1に示した。女子体育大生は毎日練習をしていたがほとんどで、一般女子学生は約5割であった。そのうち、「毎日3～5時間」の課外活動が行われていた。課外活動レベルにより活動日数、時間の違いが明確になったが、放課後や休日は課外活動に時間を費やし専門性を高めていること。課外活動に取り組むことで学習意欲の向上や責任感、連帯感など養うことを目的として多くの学校で取り組まれていることがわかった。

2) 課外活動指導者は教育や指導に熱意を持っていたについて表2に示した。女子体育大生、一般女子学生とも課外活動時の指導者は熱意を持って指導していたがほとんどであった。課外活動の指導者は、専門性の有無にかかわらず、生徒のために多くの時間を費やし生徒と共に課外活動に励み、指導されていることがわかった。また、2015「学校現場における業務改善のためのガイドライン」にあるように、専門性を有する外部指導者の活用や学校内外での研修などで、課外活動の技術的な指導や指導上の専門的、技術的な協力を得て課外活動が行われているのではないと思われる。

3) 学校側の課外活動への理解や支援について、「とてもあった」、「あった」回答が66.6%で、「あまりなかった」、「なかった」回答が11.1%であった。「どちらとも言えない」、「わからない」回答が22.3%であった。このことから、学校教育における位置づけ、意義や役割を踏まえ課外活動が行われていた。専門的な知識や経験がない顧問に任せきりにするのではなく、専門性を有する指導員を配置するなど、課外活動の

表1 高校時代の課外活動時間

		毎日5時間以上	毎日3-5時間	毎日、3時間未満	週3-5日	週1-2日	わからない
女子体育大生	競技レベル高	13.5%	64.6%	12.4%	8.8%	0.0%	0.7%
	競技レベル低	5.2%	50.5%	13.4%	25.8%	4.1%	1.0%
一般女子大生		4.8%	35.2%	13.9%	17.1%	19.7%	9.3%

表2 指導者の熱意について

		とても+熱心であった	どちらとも言えない	あまり+まったく熱心ではない	わからない
女子体育大生	競技レベル高	94.9%	3.7%	1.5%	0
	競技レベル低	88.4%	5.3%	6.3%	0
一般女子大生		70.4%	11.6%	9.0%	9.0%

運営や指導するに当たり、学校組織全体で目標や方針を共有されていること。また、複数校合同による活動で効率的な活動が行われているのではないと思われる。

4) 課外活動の指導者には何でも相談できたについて表3に示した。女子体育大生、一般女子学生とも4割から6割の学生が「とても+相談できた」と回答していた。一般女子学生も毎日の課外活動で、指導者と接する時間が多くなり、適切な指導やコミュニケーションの充実によるものと思われる。

5) 課外活動の施設は充実していたかについて表4に示した。女子体育大生と一般女子大生とも、施設の充実について約半数が充実していたと回答していた。課外活動には活動場所が必要となるが、運動部の場合、ほぼ全ての学校にグラウンド、体育館、水泳プール、テニスコート、武道場などが整備されていることが挙げられ、

課外活動の発展には大きい役割を果たしていることが伺える。

6) 大学で高校時代と異なる課外活動に所属している理由について、女子体育大生、一般女子大生では、「様々な種目経験を積みたい」、「自身の成長につながりそうだったから」が多かった。女子体育大生の「高校時の専門種目を更に磨きたい」、「様々な種目経験を積みたい」を回答した学生はスポーツに

興味と関心を持っていることが挙げられる。様々な種目を行うことで、心身を養い、豊かな人間性や豊かな学校生活を求めているのではないか。また、一般女子大生のその他の項目では、「高校時代より楽しんで取り組みが出来る種目を選択したいと思ったから」、「課外活動(部員)の雰囲気が良さそうだったから」、「活動日数または活動方法が自身に適していたから」が多く、まったく課外活動をしないのではなく、協調性や責任感、連帯感などを充実させたい思いがあるのではないと思われる。

7) 高校時代には十分に専門技能や技術を伸ばすことができましたかでは、「とても伸びた」、「伸びた」の回答が女子体育大生約8割で、一般女子大生約6割であった。課外活動を高校から始めて行う生徒、中学から行ってきた活動を高校でも継続する生徒と夫々様々であるが、ある程度、自分の成長度合いが理解できていること。課外活動の種目ごとで自己の力の確認や努力に対する達成感、充実感を得ているのではないと思われる。

8) 課外活動は進路にどのくらい影響しましたかについて表5に示した。女子体育大生は約8割が影響を受けていた。一般女子大生は、影響を受けたが約3割、あまり影響を受けなかったが約4割であった。取り組みたい課外活動の種目は身につけたい技能や記録の向上の程度が様々で、より高い水準の技能や記

表3 指導者への相談状況について

		とても+相談できた	どちらとも言えない	あまり+相談できなかった	わからない
女子体育大生	競技レベル高	59.0%	24.0%	16.0%	1.0%
	競技レベル低	50.0%	25.0%	25.0%	0.0%
一般女子大生		42.6%	28.8%	19.8%	8.8%

表4 課外活動の施設について

		とても+充実していた	どちらとも言えない	あまり+充実していなかった	わからない
女子体育大生	競技レベル高	71.0%	14.7%	14.3%	0.0%
	競技レベル低	49.0%	23.5%	27.6%	0.0%
一般女子大生		54.4%	20.3%	19.5%	5.8%

表5 課外活動の進路への影響について

		とても+影響を受けた	どちらとも言えない	あまり+影響を受けなかった	わからない
女子体育大生	競技レベル高	86.2%	6.3%	7.5%	0.0%
	競技レベル低	76.3%	11.3%	12.4%	0.0%
一般女子大生		34.6%	19.0%	40.1%	6.3%

録に望むことを重視する。また、楽しさや喜びを味わい、互いに励まし、協力する中で友情を深めるなど人間関係の形成を目的として課外活動を行っていたのではないだろうか。

9) 課外活動は自分自身の人間的な成長にどの程度影響しましたかについて表6に示した。女子体育大生、一般女子大生ともに「とても影響を受けた」、「まあ影響を受けた」の回答が多かった。課外活動を親しんでいることで、仲間を尊重し、仲間と協同する中で、実践的な思考力や判断力を身につけ、人格形成はもとより健全な心と身体が充実していたのではないだろうか。

3. まとめ

2015(平成27)年度女子体育大生、2016(平成28)年度一般女子大生の高等学校における課外活動の実態を調査し、比較を行った結果、次のことが明らかになった。

女子体育大生と一般女子大生では、課外活動の活動レベルで活動日数や時間に違いがあるが、放課後や休日は課外活動に時間を費やし、専門性を高めることや学習意欲の向上、仲間との連帯感など養うことを目的として多くの学校で取り組まれていた。そして、学校組織全体で目標や方針が共有され、効率的な活動が行われているのではないかと思われる。

課外活動の指導者は、専門性の有無にかかわらず、生徒のために多くの時間を費やしていたことで、生徒との接する時間が多くなり、適切な指導やコミュニケーションの充実が図れていることが示唆された。

課外活動の盛んな種目や活動レベルによっても施設の充実が伺えたことで、課外活動では、自分の成長度合いが理解でき、自己の力の確認や努力に対する達成感、充実感を得られていることが推察できる。

そして、課外活動の活動レベルにより、高い水準の技能や記録に望むことを重視した活動も楽しさや喜びを味わい、互いに励まし、協力する中で友情を深めることを重視した活動も人格形成はもとより健全な心と身体が充実していたのではないだろうか。

引用文献・参考文献

- 文部科学省(2015) 学校現場における業務改善のためのガイドライン
 文部科学省(2013) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～
 女子体育研究所(2016) 東京女子体育大学女子体育研究所所報

表6 課外活動による人間的成長について

		とても+影響を受けた	どちらとも言えない	あまり+影響を受けなかった	わからない
女子体育大生	競技レベル高	98.1%	1.9%	0.0%	0.0%
	競技レベル低	91.3%	4.3%	4.3%	0.0%
一般女子大生		79.0%	8.9%	5.8%	6.3%